# Library

第 47 号
編集・発行
信州大学附属図書館
繊維学部分館
平成15年4月30日

CONTENTS

世界のシルクの町へ飛ぶ(3)　分館長　三浦 幹彦　(2)
分館通信　告知板　(7)
分館日誌　(8)
編集後記　(8)

Library(電子版)はインターネットでも提供しています。
URLは http://www-lib.shinshu-u.ac.jp/seni/online.html です。

# 世界のシルクの町へ飛ぶ（３）

分館長　　三浦　幹彦

**これまでのあらすじ**：アメリカ・パターソンに作られるシルク博物館の記事から，この町と日本の岡谷市との間に不思議な関係を見つけた。これを機にパターソンの撚糸・織物技術のルーツを求めて，イギリス・マクルスフィールドに飛んだ。この地での情報をもとにさらなる撚糸技術のルーツを求めて次の「シルクの町」ダービーへと飛ぶことになった。

## 1.　ダービーと産業スパイ

ダービー(http://www.derby.gov.uk/tourism/index.htm)はマクルスフィールドのすぐ近くに位置している町である。車ならわずかだが，列車だと途中ローカル列車に乗りかえて１時間ほどかかる。ダービーのシルク技術を探し始めるとすぐにインターネット上でダービーのシルク工場(http://www.users.totalise.co.uk/~alocke/silkmill.htm)というのが見つかった。幸運にもダービーの撚糸技術のルーツが，その紹介記事の中にはっきりと書かれていた。パターソンシルク技術のルーツ探しに手間取った私にとって少し拍子抜けした感じであった。それによれば，「世界で最初の産業スパイとされるジョン・ロム(http://www.spartacus.schoolnet.co.uk/TEXlombe.htm)という人物が、シルク製造技術、特に撚糸機械の秘密を盗むためにイタリアのピエモント地方(http://www.cuneotourism.com/home.ihtml?p=dove&lang=eng)、別の説ではリボルノの撚糸工場へ働きにでかけた」とある。つまり，マクルスフィールド撚糸技術はダービーを経由してイタリアのピエモント（地方）から来ていたのである。このイタリアで「ジョン・ロムは昼には工場内で働き，夜になると撚糸機の構造や仕様をひそかに写し取る日々を送った」ということである。「こうして，この秘密書類を注意深くイギリスに出荷されるシルクの荷の中にひそませて」，それを「途中で待っていた仲間が抜き取り，ダービーに持ち帰った」とある。「ロムはその後，イギリスに逃げ帰り，1717 年にダービーにシルク撚糸工場を建てた」。重要な技術が伝わっていくのは，意外にこうした方法が多いのかも知れない。ただ，ダービーのシルク工場建設の年が，マクルスフィールドシルク博物館の説明と１年ずれるが，これについては深入りしないでおこう。この工場は弟トーマス・ロムの協力の下に大成功を収め，産業革命の生起に重要な役割を果たした。この結果，マクルスフィールドのジョン・ロムの工場を初めとして，マンチェスター，ノーウッチ，チェスタフィールド，ストックポートで相次いでシルク撚糸工場が建てられていったのである。数年後，1722 年に 29 歳の若さでジョン・ロムが死んだときには，「撚糸機械の秘密を盗まれ怒ったイタリアの工場主が，復讐のために暗殺者を送り込み毒殺した」といううわさがたったようだ。この話は，ウイリアム・ハットン著『ダービーの歴史』[編者注1]に載っているそうだ。また，チョロナー著『産業革命期の人々』[編者注2]にもある有名な話らしく，上条宏之著『絹ひとすじの

青春』NHK ブックス[編者注3]においても「イタリア式製糸技術」の項で同じ話が紹介されている。残念ながら，このジョン・ロムの工場は 1910 年に焼けてしまい，ベルタワーだけが残ったようで，現在はここにダービーの(http://www.derby.gov.uk/services/museums/index.htm)産業博物館が建っている。こうして，イギリス初の本格的シルク撚糸工場建設の地ダービーも現在ではシルクとは縁遠い町となってしまった。（注）さらにダービーのシルク技術の歴史に興味のある人には，Harry Butterton (1996)：“The old Derby silk mill and its rivals: An illustrated history”, Greenaway[編者注4]をすすめる。

マクルスフィールド，ダービーの撚糸技術は産業スパイによりもたらされたイタリアのピエモントの技術であったので，次はこれを求めてイタリア・ピエモントへ飛ぶということになるが，この話は別の機会に残しておこう。ここでは，もう一度マクルスフィールドに戻り，絹織物のルーツを探すことにする。

## 2. マクルスフィールド絹織物技術のルーツ

マクルスフィールド撚糸技術のルーツはダービーを通して簡単に見つかり，イタリア・ピエモントまで遡ることができた。絹織物技術のルーツ探しもそうあってほしいという期待を抱きながら，すでに私にとっては，打ち出の小槌みたいになったコリンズ女史の博物館冊子を詳細に調べた。残念ながら絹織物に関して直接そのルーツを示す記述はなかったが，次の手がかりらしき記述が見つかった。「最初，ほとんどの糸はロンドン・スピタルフィールド（Spitalfields）の織工たちのところに送った。18 世紀半ばに，マクルスフィールドも織物を織っていたが，1780 年まで重要な役を果たさなかった。」

これによれば 18 世紀半ばまでは，マクルスフィールドの糸はロンドンのスピタルフィールドに送られてそこで絹織物にされたらしい。マクルスフィールドでは，高級絹織物を製造する技術はなかったのだろう。それが，後にマクルスフィールド縞とよばれる独自の絹織物を生産できるまでの技術を持つことになる。この技術は，スピタルフィールドとの結びつきの中で，そこの職工達から手に入れたと考えても不思議はないだろう。この予想を確かめるため，ロンドン・スピタルフィールドへと飛んだ。

## 3. ロンドンのイーストエンド

### 3.1 スピタルフィールド

さっそく地図，インターネットの順に調査を開始した。最初に，「AZ ロンドン道路地図」という本でスピタルフィールドを調べた。この本は，17 年前初めてロンドンを訪れた時以来利用しているもので，既に 2 冊目（1986 年版，2000 年版）に入り大変気に入っている。スピタルフィールドはロンドンのイーストエンドと呼ばれる下町のタワーハムレット区にある(http://www.towerhamlets.gov.uk/data/discover/data/spitalfields/index.cfm)。地下鉄のリバプールストリート駅(http://www.ukguide.org/london/londonmap.html)で降りれば近い。駅からクライストチャーチを目指して進めば左手に有名なスピタルフィールド・マ

ーケットの建物に出会う。また，まわりの通りには多くの路上マーケットが開かれる地区がある。その周りの道路地図をみていると職工通り(Weavers Street)というのを見つけた。試しに，1986 年版でシルク(silk)の名がついた通りを探してみると近くに見つけることができた。桑(mulberry)通りという通りもいたるところに見つかった。ちなみに，ロンドンだけで職工通りが 5 つ，シルクと名の付いた通りが 4 つ見つかった。その中に「Silk Mill St.(シルク工場通り)」というのがあった。おそらくこの道の周辺にかってシルク工場があったのであろう。また，桑の名のついた通りは 16 見つかった。職工やシルクよりも圧倒的に多い。不思議に思い，その原因を調べてみた。その結果，これには次のような理由があることがわかった。（残念ながら，再開発のため新しい版では，数が減っている）

ジェームス 1 世(http://www.jesus-is-lord.com/kinginde.htm)は，イギリスでシルク産業を振興させるため，イギリス全土に桑の木を植えた。現在のバッキンガム宮殿(http://www.royal.gov.uk/output/Page1.asp)の近くに大規模な桑畑が作られたらしい。この試みは失敗したようだが，現在でもこの時代に各地に植えられた桑の木がいくつか残っている。私の手元にある 1996 年 11 月号「カントリーライフ(Country Life)」(http://www.countrylife.co.uk/home.htm)紙によれば，ロンドンではエンバンクメントの近くにある「ミドルテンプル」(http://www.innertemple.org.uk/tour/sppage6.htm)内庭の泉の側に，古い時代の桑の木を見ることができるということである。ここは，チャールズ・ディケンズが小説の舞台とした有名な泉でもある。残念ながら，一般の観光客には開放されていない。400 年以上の桑の木で観光客が見られるものは，ケント州のチルハム城の庭園にあるので(http://www.st-marys-canterbury.kent.sch.uk/village.htm#CASTLE)，興味ある人は見ておくといいかもしれない。イギリスの子供の遊び歌の中にも「桑の木」という言葉がよく出てくるが，おそらくこの時代に作られた歌であろう。

話をスピタルフィールドにもどそう。さらに驚いたことに，スピタルフィールド周辺の道路にマクルスフィールド通りを見つけた。昔，この道を通ってマクルスフィールドからシルクの糸が送られてきたのだろう。

スピタルフィールドの名前は，ここにあった野原（フィールド）に，聖メアリー・スピタルという病院が（病院のホスピタルからきている）あったことに由来しているらしい。その後，移民や難民のメッカとなり，18 世紀はフランスプロテスタント（ユグノー），19 世紀はユダヤ系移民，現在はバングラディッシュ系移民が多く住む場所で，バングラ・タウンという名前がついていてレストランが数多く集まり，下町っこや土地っ子に人気がある。また，スピタルフィールドマーケットのそばには有名なロンドンの切り裂きジャックゆかりのパブがあり，壁に殺された娼婦の肖像画があるのでビターでも飲みながら休むとよい。現在この地区は大規模な再開発が行われており(http://www.spitalfields.co.uk/)，歴史的なシルク織物工たちが暮らしていた下町の家並みが消えかかっている。それでも，リバプールストリート駅から左に向かいマーケットの建物の裏あたりの細い路地にわずかにその姿を見ることができる。織物作業のため最上階に大きく太陽光を取り込むための窓を

持つ家並みが続いている。

こうして，スピタルフィールドに関する情報は多く集まったが，まだ，マクルスフィールドにここの絹織物技術が伝わったという記述はどこにも見つからなかった。

### 3.2　ユグノー

さらに情報を求めて，再びインターネット検索を開始した。偶然に，次のようなスピタルフィールドに関する重要な資料が公開されていることを探し当てることができた。それは，シドニー・マドック氏が 1931-1932 年に「コパートナー・ヘラルド」に執筆したスピタルフィールドの歴史に関する 5 部からなる膨大な記事である(http://www.thhol.freeserve.co.uk/spital1.html)。素晴らしい内容の記事で，興奮して一気に読み終えた。全てはとても紹介できないが，必要なところだけかいつまんで記しておこう。「スピタルフィールドの急激な発展は 17 世紀の終わりに，大勢のフランスプロテスタントがここに移住したことによる。（中略）ユグノーとして知られているこのフランスプロテスタントたちがルイ 14 世による 1685 年のナントの勅令(少なくとも 80 年以上にわたりプロテスタントたちの権利を守ってきた）を廃止したときに，迫害を恐れて祖国を逃げたときである」。この文は，スピタルフィールドとフランス難民（ユグノー）との関係を指摘している。「（中略）ユグノーに対するこの措置は，これから長い年月にわたりフランスから高度な技術を持ち，勤勉で質素な人々を他国スイス，オランダ，イギリスに追いやり，フランスに大変な損失を与えることになる。（中略）この難民は，イギリス各地に移住した」。スイス，オランダでシルク産業が発展し，現在シルク博物館(http://www.silkmuseum.com/)として残っているのもユグノーと関係するのかもしれないが，現在は具体的資料がないのでわからない。このナントの勅令後にやってきたユグノーによって，スピタルフィールドに絹織物工業が起こったと思ったが，実際にはそうではないようだ。次のような記述がある。

### 3.3　織物職人の集まったスピタルフィールド

「ロンドンにやってきたユグノーの多くが，絹織物工で，その他は商人が多かった。（中略）このユグノーの移住により，この地区（スピタルフィールド）に絹織物工業が出現したわけではない。この時には，すでにこのあたりに絹織物工業が存在し，疑うべくもなく，そのために，ユグノーたちがこの場所を選んだのである」。この時，すでにスピタルフィールドには織物工業が存在していたのだ。その起源についてマードック氏は次のように続けている。「これより以前，数百年にわたり，オランダやフランスからの難民がこのあたりにやってきていた。こうした難民の多くは，ここで絹織物関係の商売を始め，その結果，このあたりに建物が立ち並ぶようになった。ロンドン中心街の近郊に位置するこの地は，最大の消費地に近く，たえず変化するファッションに対応するには，シルク工業者にとって格好の場所であった」。「1685 年以降，この地区は驚異的な勢いで発展し，1738 年までには

立派な舗装道路となった。（中略）1746 年には，スピタルフィールドには 2190 軒の家があったといわれている。（中略）スピタル広場の大きな家は，シルク商人と絹職工の親方たちで占められていた。（中略）フロンティアストリート 14 番地にあるハワード家は 1726 年にある職工の親方により建てられたものである。（中略）現在の住人によれば，ビクトリア女王が即位式に着用したシルクはここで織られたとのことである」（注：現在のイギリス皇室や各地の城の装飾品は，シャーボーンのシルク農場の生糸，中国からの輸入生糸を用いて，ブライントリーの工場博物館を中心に昔ながらの方法で織られている）。(http://www.thisisessex.co.uk/essex/local_interest/towns__villages/braintree.html)。ただし，「（中略）いつもこのスピタルフィールドに（ユグノー）難民が集まっていたというわけではない。たしかに，18 世紀の初めには住民の大半がそうであったけれど。時代とともにフランス色が消えていった」。

マードック氏の話はさらに続き，ついに私の探し求めていたものにたどり着くことになる。（続く）

**文中に出てくるホームページは分館長が原稿を書かれた時点のものです。**
**そのため Library 発行時につながらないものがあるかもしれませんがご了承ください。**


編者注 1）
William Hutton. The history of Derby. London, Printed by J. Nichols, 1791, 320p.

編者注 2）
チョロナー．産業革命期の人びと．武居良明訳．東京，未来社, 1967, 221p.
[原本：W.H. Chaloner. People and industries. London, Cass, 1963, 151p.]

編者注 3）
上条宏之．絹ひとすじの青春：『富岡日記』にみる日本の近代．東京，日本放送出版協会, 1978, 234p. NHK ブックス 320

編者注 4）
Harry Butterton. The old Derby silk mill and its rivals: an illustrated history. Derby, The Author, 1996, 100p. (ISBN:0952910209)


**今回ご紹介いただいた上記図書を、繊維学部分館に展示してあります。<～5/9(金)まで>**
**場所は新着図書コーナーの棚の上です。貸出はできませんので館内でご覧ください。**

**現在購入することができない、または困難な図書であるため、注２・３は他の図書館から、注４は三浦先生からお借りしました。この場をお借りして御礼申し上げます。**
**（注１は残念ながら入手できませんでした）**

# 告知板

ここでは図書館からの最新の情報をお知らせしています。
次号 Library 発行までのお知らせは、Library 号外として構内の掲示板や繊維学部分館ホームページ（http://www-lib.shinshu-u.ac.jp/seni/）でご案内していますので、そちらをご覧ください。

## ⇒ *平成 15 年度係員の職務分担*

平成15年度の係員の職務分担は下記の通りです。

| 担 当 者 | 内 線 | e-mail アドレス | 職 務 分 担 |
|---|---|---|---|
| 内海係長 | 5313 | utsumih@gipac.shinshu-u.ac.jp | 分館事務総括 |
| 濱　光子 | 5016 | Mitsuko_Hama@su-oasis.jm.shinshu-u.ac.jp | 備付機器等保守 |
| 渡辺彰宏 | 5016 | jfc2101@giptc.shinshu-u.ac.jp | 雑誌（購入・製本）／目録（雑誌）<br>別刷 |
| 川西玲子 | 5015 | jjl2200@gipac.shinshu-u.ac.jp | 図書購入／目録（図書）<br>文献複写（受付） |
| 滝口智子 | 5015 | jfc0200@giptc.shinshu-u.ac.jp | 文献複写（依頼）／現物貸借<br>広報／情報システム管理 |

*＊ 図書館の利用案内、資料の所蔵確認、各種データベースの検索方法などは係員全員が担当しますので、お気軽にお尋ね下さい。*

## ⇒ *開架室へのカバンの持ち込みができるようになりました*

平成 15 年 4 月 1 日より、開架室へのカバンの持ち込みができるようになりました。今までどおりロッカーも用意してありますので、大きい荷物がある場合などはそちらをご利用ください。なお、貴重品は必ず身につけるようお願いいたします。

# 分館日誌

（1月～3月）

| | | |
|---|---|---|
| 2/17 | 第 1 回 信州大学学術情報・図書館委員会<br>:学術情報専門部会<br>（SUNS） | 出席者－太田委員 |
| 2/24 | 第 4 回 館長・分館長懇談会<br>（附属図書館会議室） | 出席者－三浦分館長<br>内海係長 |
| 3/7 | 第 1 回 信州大学附属図書館講演会<br>（人文学部 212 教室）<br>講師 山本洋雄教授<br>[信州大学教育システム研究開発センター]<br>『大学の e-Learning 化について』 | 出席者－内海係長 |
| 3/14 | 第 1 回 EBSCO host 利用説明会<br>（附属図書館会議室） | 出席者－川西<br>滝口 |
| | 第 2 回 信州大学附属図書館講演会<br>（SUNS）<br>講師 中元誠総務課長[早稲田大学図書館]<br>『早稲田大学の図書館戦略』 | 出席者－内海係長<br>川西<br>滝口 |
| 3/20 | 第 3 回 信州大学附属図書館講演会<br>（SUNS）<br>講師 加藤好郎事務長<br>[慶應義塾大学三田メディアセンター]<br>『慶應義塾大学の図書館戦略』 | 出席者－渡辺<br>川西 |
| 3/25 | 第 3 回全学図書関係係長会議<br>（附属図書館会議室） | 出席者－内海係長 |

## 編集後記

構内のツツジも目に鮮やかな季節となりましたが、今年度は繊維学部分館の職員に異動がなく、比較的落ち着いた春を迎えることができました。ただその分、業務を惰性でこなすことのないよう気を引き締めなければ・・と思う今日この頃です。さて、今号も前号に引き続き三浦分館長にご寄稿いただきました。このシリーズもいよいよ次回で最終回とのことで、世界のシルクの町をたどる旅がどのような終着を迎えるのか楽しみです。分館長先生、お忙しい中ありがとうございました。

次号は7月の発行を予定しています。利用者の皆さんの声も Library に掲載したいと思いますのでご意見・書評など何でもお寄せください。係員に直接、または E-mail での寄稿もお待ちしています。

E-mail アドレスは、jfg0100@giptc.shinshu-u.ac.jp です。